

第二回

前期（明治中期～大正初頭）

輸入住宅とともに導入されたツーバイフォー

はじめに

1870年代後半に北海道を中心に導入が試みられたバルーン・フレイム構造ツーバイフォー工法の原形は、すぐには定着しなかった。このことは、開拓使官繕課の安達喜幸が中心になって設計し、1880（明治13）年に竣工した洋式ホテル・豊平館が洋風建築の最高峰といわれるものの、構造は在来構造を基本にしていたことから窺える。

その後、アメリカ式木構造の導入がどのように図られたのかは定かではない。それでも、1889（明治22）年頃竣工したといわれる明治学院インプリー館（旧宣教師館）は、様式はアメリカのクイーン・アンスタイルとし、構造は日本の在来構造にアメリカの柱梁構造とバルーン・フレイム構造を結合したものであるという。この頃にはアメリカ式建築の建設時に、デザインだけではなく新しい建築構造の導入も試みられていたのである。

「あめりか屋」の輸入住宅

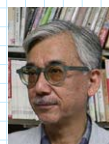
1909（明治42）年、アメリカ式住宅の輸入販売を目的とする「あめりか屋」が創設された。店主の橋

口信助は、1890年頃アメリカに渡り、シアトル市の日本人街で雑貨商を営み、財を築いた。そして、帰国後の新事業としてアメリカで売られていた住宅や建築部材を日本で売買することを考えた住宅6棟と建築部材や家具などを購入して帰国したのである。1909年当時、洋家具店が集まっていた東京・芝区に店を構え、持ち帰ったアメリカ製住宅をはじめ建築部材などを販売した。翌年、販売した1棟の建設の様子が建築雑誌で紹介された（図1）。この建物構造の詳細に関して、以下のように記されている。

建坪約二十五坪費用約二千八百円工事日数七十五日を以て竣工せりその構造部は松材を使用し裝飾部には米松を用ひたり其木材の大きさは総三寸角二ツ割及び背六寸巾一寸五分の松材板割、四分板の他何物をも使用せざりしは特に注目すべき点なり……柄穴ホルト及短冊金物等を用いず悉く西洋釘及鋸を以て結合せり……
〔純米国式木造住宅建築東京に建築せらるる〕「建築雑誌」No.288 1910年

建築部材は、三寸角二ツ割、背六寸巾一寸五分の板割、四分板という板材だけとあり、ツーバイフォー

住宅であることは明らかである。部材の種類のみならず、この構造の特徴であり、アメリカ人の考えた合理性が反映されているといえるであろう。また、結合も西洋釘と鋸^{かすがい}だけであることも新構造であることを示している。橋口が輸入した残りの住宅の構造も、おそらく同様のものではあったと思われる。いずれにせよ、橋口が持ち込んだアメリカ式住宅は、1914（大正3）年にすべて販売・建設された（図2）。アメリカ式の新構造が輸入住宅という住宅の商品化のなかで、日本に持ち込まれていたのである。



内田 青蔵 Seizo UCHIDA

神奈川大学工学部建築学科教授
工学博士。専門は日本近代建築史。幕末・明治以降の住宅建築の歴史研究の第一人者。歴史的建築物の保存・活用を唱える。主な著書は「日本の近代住宅」（鹿島出版会）、「お屋敷拝見」（河出書房新社）など



図1 「あめりか屋」輸入住宅
（『建築画報』4巻2号 1913年2月）



図2 「あめりか屋」輸入住宅
（『建築画報』4巻4号 1913年4月）

西村伊作自邸に採用された アメリカ式新構造

文化学院の創立者として知られ、のちに西村建築事務所を開設する西村伊作は、若い頃より建築に興味があったようで、自らの住宅建設にあたってアメリカから本を取り寄せ、独学で建築の勉強をした。そして1906（明治39）年、22歳の時に故郷和歌山県の新宮町に山荘を建てた。その山荘は、平屋で広いベランダと「居間」からなる建物で、西村は「バンガロー風」と記しており、当時のアメリカで流行していた住宅様式を取り入れたのである（図3）。1908（明治41）年には、結婚後の新居にするため山荘に2階を増築したという。その際建設については、次のように述べている。

二階はアメリカかふうの建築のしかたを応用した。つまり、バルーン・フレイミングといって、日本ではそういう建て方はやっていない。日本のは角な柱を用いて建てる、そのバルーン・フレイミングと言つのは、柱を用いないで二インチと四インチの「ぬき」のようなもので建てて、それに板を張るやり方である……（西村伊作「我に益あり・西村伊作自伝」1960年）

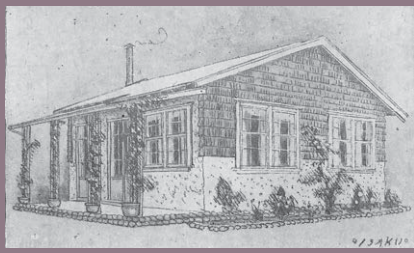


図3 西村伊作山荘
（西村伊作「現代人の新住家」1924年）

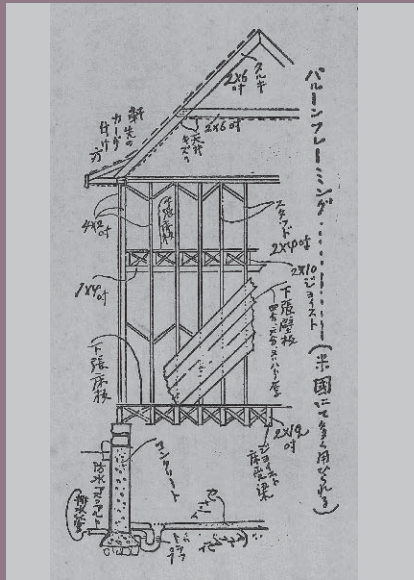


図4 西村が紹介したバルーン・フレイム構造
（西村伊作「現代人の新住家」1924年）

西村は、自ら取り入れた独自の方法をアメリカのバルーン・フレイム構造であると紹介している（図4）。自邸建設の際、どこまでバルーン・フレイム構造を採り入れたのかは不明だが、橋口が輸入住宅業を開始するとはほぼ同時期に、西村は自邸建設に、アメリカ式の新構造の導入を試みたのである。

建築家小笹三郎が持ち込んだ新構造

アメリカのオレゴン州立大学で鉱山学を学んだ小笹三郎は、1908年オレゴン鉄道株式会社に入社し、シアトルで建築活動に従事した。そして、1911（明治44）年帰国し、合資会社小笹工務所を構えた。小笹が、明治末期に手掛けた住宅が旧木下建平邸（図5）である。小笹は、この住宅にプラット・フォーム構造を採り入れていた（図6）。ちなみに、プラット・フォーム構造とは、バルーン・フレイム構造を発展させたもので、建築部材は同じ板材を使用しつつも、1階・2階の柱材が独立し、1階部分を建てその上に2階を重ねるといったものである。小笹は、同時期に様式的にも極めて類似した住宅を手掛けている。おそらく、同じプラット・

フォーム構造で、紹介記事には「亜米利加式カントリーハウス」で、「脚場不使用の建築物」「僅々三箇月で工を終わる」とその構造に関わる特徴について触れている（図7）。
このように、明治末期には、交通手段

の発展もあり、人の行き来やモノの輸出入といった文物の交流のなかで、アメリカの建築技術や考え方が導入されていたのである。そうした時代の変化のなかで、アメリカで生まれた新構造が再び、注目されることになる。



図5 小笹設計の旧木下建平邸（内田撮影）

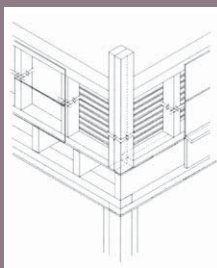


図6 旧木下建平邸に採り入れられたプラット・フォーム構造（神奈川大学大学院生 福重涼太作成）



図7 小笹設計の小野友次郎邸
（『建築画報』3巻5号1912年5月）

■参考文献

- 木下・内田・金・福重「わが国の明治・大正期におけるツーバイフォー住宅の変遷に関する一考察」日本生活学会第41回研究発表大会 2014年5月11日
- 明治学院「明治学院旧宣教師館（インブリー館）建物調査報告書補遺木構造技術調査報告」1996年
- 内田青蔵「素人建築家・西村伊作の誕生」『衍書月刊』2006年6月号
- 田中修司「西村伊作の楽しい住家」はる書房 2001年
- 山口廣「山口廣退官記念講義集」1997年